
三人で旅行に…

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人で旅行に…

【Zコード】

N7117D

【作者名】

石子

【あらすじ】

仲の良い友達と旅行に出発した郁。いつものよつとん賑やかにおしゃべりをしていたはずだが、なぜか違和感が…

私は、会社の同僚一人と車で旅行に出発した。一人とも気の置けない友達だ。

計画を立ててくれたのは、今車を運転している麻子である。よく気の利く子で、仕事もテキパキこなすが遊びの計画もぬかりない。そして、助手席に座っているのが愛美。おつとりとした性格で、自分で計画を立てるのは苦手、というタイプだがそこが麻子と馬が合つようだった。

「『めんねえ。わたし運転できなくて。麻子ちゃんはずつと運転してて大丈夫?』

と愛美が心配そうに言つたので、

「麻子、運転疲れたら言つてね。代わるから」

私も後部座席から呼びかけた。

まだ出発したばかりだが、確かにいつも頼りっぱなしというのも気が引ける。

「平気。わたし運転好きだから気にしなくていいよ」
あつさりと言つてくれた。しばらく運転は任せておいていいだろう。

う。

「ねえねえ。今日泊まる旅館の写真がこのガイドブックにも載つてるんだけどすつ『こ』に綺麗だよ~」

嬉しそうに愛美が言つ。どうやらガイドブックを見ているようだ。
「車の中で読んでたら気分悪くなるわよ」

しうがないなあと思しながら、私は言つた。以前も車の中で何かを読んでいた事があり、気分の悪くなつた愛美は途中で車を止めてもらつてしまふく休んだり、という騒動を起こしている。

「愛美。前にしんどくなつて、皆に迷惑かけたこと忘れたの?」

麻子も私と同じ事を思い出していたらしい。

「そつか。えへへ。忘れてたよ～。でもわたしいつも車に酔わないんだけどなあ」

懲りないことを言つた愛美は、名残惜しそうにまだひざの上に広げているガイドブックを見ている。

「ダメ」

ちょうど赤信号で停まつた時、麻子が横から愛美のガイドブックを取り上げると、後ろに投げて寄越した。

ちょうど愛美が見ていたページが開かれたまま私の横にぱさりと落ちる。

「あ～！ 麻子ちゃんひどいなあ。今から旅館の周りの観光地を見るつもりだつたのに～」

愛美は抗議の声をあげるが、もちろん笑い混じりでたいして怒っているわけではない。

「没収ね」

私も笑いながら言った。

「観光に行くところは、私が調べてるわよ。ちゃんと予定を言つたでしょ？」

麻子はやれやれという感じだ。

「そつなんだけど、見ると楽しいんだもん。」

……気持ちはわかる。実は私も、思わず愛美のガイドブックを眺めていたりする。手に取ると私まで目がはなせなくなりそうなので、ちょうど開いていたページを上から見ているだけだが。

出発前にも麻子がパンフやらを見せてくれていたが、改めてガイドブックの写真を見ていると、やはりわくわくしてしまうものだ。

「それにしても旅行なんてほんと久しぶり。なかなか休みも合わないしね」

「そうよね、うちは部署が違うと休みを合わせるのも難しいのよね」

麻子の言葉に、私も相槌を打つ。

「うん……。あんなこともあつたしね……」

愛美はしばらく黙っていたが、独り言のよつに呟いた。

あんなこと……？

前を向いている愛美の表情は見えないが、寂しそうな顔をしてい るよつに感じられた。

なんだろう？

思い当たらない。最近、仕事帰りに皆で飲みに行つたりもしてないしなあ。なんかあつたのかも知れない。聞くべきか聞かざるべきか……。

「愛美、なんかあつた？」

「そのことは、もう言わないのっ！」

あ。麻子の言葉と思いつきりかぶつちゃつたわ。
麻子は何か知つてゐみたいだ。

「1J……1Jめん！ つこつ……。もう、やだな……わたしつたら。この話はしないつて言つてたのにね。きっと、郁ちゃんにも気を使わせちゃつよね。ホントに1Jめん……」

愛美は慌てて取り繕つ。ちなみに、郁といつのが私の名前だ。

「別にいいけど……」

気になるが、無理に聞き出す「ともない。言いたくなつたら言つてくれるだらう。すつとわざつこつ付き合ひをしてきたしね。

ちよつと沈黙……。

そんな時、麻子がさりげなく音楽をかけてくれた。
あ……。1Jの曲……。

「愛美、好きでしょこの歌。郁も好きつて言つてたよね。これ聴いて元気になれるかどうかわかんないけど、でも気まずい感じになるのはやめよう」

麻子はさすがだなあ。

それは私の学生時代に流行つた曲で、その歌の話題で愛美と盛り上がつたことがある。

愛美はそれを聴いて、「麻子ちゃん……。ありがと……」なんて言いながらちょっと涙ぐんでいるようだ。

「はいはい。泣かないの。とりあえず、三人で楽しい旅にしようよ」麻子がその場をまとめ、しばらくは曲を聴きながら三人それぞれ景色を眺めていた。

「もうすぐよ」

麻子が言った。

私は、何のことかと怪訝に思つ。まだ出発してからそんなに走つていない。田的には程遠いはずだ。

「何がもうすぐなの?」

私は尋ねるが、聞こえなかつたのか答えは返つてこない。そうこうしているうちに車は道端に寄つて、停まった。なんでこんなところで停まるの?

と聞く前に、見覚えのある人が車に駆け寄つてくるのが視界に入つた。

「ひつひつちー！」

窓を開け、麻子が手を振る。

確かあれば会社の後輩のさやかちゃん?

こんな所で待ち合わせなんて聞いてない。一緒に行くのは構わないが……

「お待たせしました！」

……私が戸惑つている間に、さやかちゃんは車のドアを開けて乗り込んできた。

「さやかちゃんの家つてこの辺なんだねえ。会社から遠いでしよう？」

愛美も、さやかちゃんが来る事は知つていたようだ。

「ちょっと、みんな！ 私、さやかちゃんが一緒に来るって聞いてなかつたわよ！ そりや、人数が多い方が楽しいしさやかちゃんなら大歓迎だけど、一言くらい教えといてよなー」

きっと、私には言い忘れてたんだわ。

もちろんそんなことで怒るつもりもないけど、ちょっと文句を言つてみた。

「うーん。確かに通勤時間は長いんですけど、電車の乗り継ぎがないで大変じゃありますよ」

笑顔で愛美的質問に答えるさやかちゃん。

あれ……？

「ねえ、私の話聞いてる？」

「そつか。乗り継ぎがなかつたら電車の中で本とかゆっくり読めるからいいかもね」

「ねえ！ 聞いてる？」

「麻子ちゃんは読書好きだもんねえ」

……こんなに近くから呼び掛けても誰も答えない。誰とも目が合わない。

いたずら……ではない。

私のことが見えていない……？

声が聞こえていない……？

背中を、嫌な汗が伝つ。

今日の会話を思い返してみた……。

最初から私の声は誰にも聞こえていなかつた……？

「わたしがこの旅行に参加しちゃつて、よかつたんでしょ？」「さやかちゃん。来ててくれて、感謝してるのはこっちの方だよ。…ホントはすゞく迷つたんだよね。さやかちゃんを誘つかどうか。それに旅行を決行するかどうかも」

「やうだよお。前に旅行を計画してたときに、郁ちゃんが交通事故で亡くなつた事はすごいショックで、もう旅行なんて絶対しないつて思つたんだけどね。郁ちゃんならそんなの絶対嫌がる、みんなで楽しく旅行したほうが郁ちゃんも喜ぶはずだ、って麻子ちゃんに言われて……」

「ううう。その時の旅行はもちろんキャンセルしたけど、気持ちの区切りのためにもまた同じような行程で計画立てて、郁とも仲の良かつたさやかちゃんを誘つたんだ」

「そうですか。あれから随分月日も経ちましたもんね。きっと、郁さんもわたしたちが楽しめば喜んでくれますよね」

……。

車は静かに、また走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7117d/>

三人で旅行に…

2010年10月8日15時55分発行